

伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第43号 2008年9月
〒214-0014

神奈川県川崎市多摩区登戸 3460-1
パークホームズ 704

小澤昔ばなし研究所

Tel:044-931-2080

「身毒丸」と「遠野物語」

兵藤 裕己

ことしの6月7日、國學院大學で行われた第32回大会での小川直之氏の講演、「折口信夫『三郷巷談』の意趣」は、私にとってたいへん示唆的だった。

「三郷巷談」（『郷土研究』大正2年～）は、折口信夫の最初の民俗学的な著述であり、折口が柳田国男の知遇をえるきっかけとなった文章である。小川氏は、「三郷巷談」に記された商都大阪の庶民世界（下層世界）と、折口が幼少年期を過ごした地域との地理関係をスライド映像をつかって説明されていた。地図には、天王寺や合邦ガ辻、その周辺に広がる貧民街などが示され、幼少年期の折口をはぐくんだ文化的な土壌の深層がうかがえて興味深かった。

「三郷巷談」の執筆とほぼ時期的に並行して書かれた折口の小説に、「身毒丸」がある。父から持ち伝えた「業病」の不安を負う田楽座の美少年を主人公としたこの短編小説は、俊徳丸（しんとく丸）伝説の舞台となる天王寺や合邦ガ辻から指呼の距離を生活圈とし、幼少年期に乳母からたびたび俊徳丸の伝説を聞かされて育った折口にしてはじめて書けたような小説である。

小説「身毒丸」末尾の「附言」で、折口は、「(わたしは) 現今の史家の史論の可能性と表現法を疑うて居」と述べている。歴史と伝説、事実と虚構とを二項対立的にとらえ、〈事実〉の客観記述をもって科学的研究を自任する「現今の史家」の「表現法」への異議申し立てとして、あえて自分の研究に「小説の形」を用いたというのである。

「身毒丸」と並行して書かれた「三郷巷談」の先蹤として考えられるのは、たとえば、東京深川の下層社会を舞台にして書かれた泉鏡花の小説「辰巳巷談」（明治31年）だろうか。明治から大正にかけて新派劇として舞台化されて大当たりをとった小説だが、「巷談」とは、巷間の語りの謂いである。6月7日の大会では、小川氏の講演のあとに川田順造氏の講演「伝承と集合的記憶」があり、川田氏が、深川で過ごした幼少年時代をご自身の研究の原体験として語っておられたのも、私の想像をさまざまにふくらませた。

科学的・記述主義的な研究にたいして、研究のことばにパフォーマンスな力を回復しようとする意志のもとに、柳田国男や折口信夫の学問は出発したのである。柳田の場合は、いうまでもなく「遠野物語」である。小川氏が示唆されたように、「三郷巷談」と「遠野物語」という、この二つの記念碑的な著述がもつパフォーマンスなことばの力に思いをいたすことから、今日のありうべき口承文芸研究のスタイルもみえてくるのかもしれない。

（千葉県）

第55回例会
「語りと伝説-三河の浄瑠璃姫伝承-」
2008年3月8日(土)
会場 東海学園大学名古屋キャンパス

菱川 晶子 (愛知県)

近松の「源氏十二段」が約300年ぶりに操りと共に復曲演奏された本年、東海学園大学名古屋キャンパスにおいて「語りと伝説-三河の浄瑠璃姫伝承-」をテーマにした研究例会が行われた。3月8日のことである。

基調講演「文楽『浄瑠璃姫物語』の復刻にむけて」では、復刻に尽力された岡崎呉服協同組合の理事長加藤善啓氏がその経緯について、また地元での浄瑠璃姫伝承の受け止め方や在地伝承との関わりを、詳細な資料に基づいて述べられた。後半のシンポジウムでは、小林幸夫氏の司会のもと、堤邦彦氏の「浄瑠璃姫伝説をめぐる唱導」と深谷大氏の「浄瑠璃姫物語-絵巻と伝承をめぐる-」の2発表があった。堤氏は、浄瑠璃姫と縁のある岡崎市内の旧跡寺院に伝わる近世縁起資料を、当時流布した略縁起と共に検討し、略縁起の在り方や現世利益を説く当時の唱導の様相について論じられた。続いて深谷氏は、「浄瑠璃姫物語」の初出が『実隆公記』文明7年(1475)であることや、絵巻の構成と内容について解説され、3系統に分かれる主要伝本間の異同について指摘された。その後の質疑応答では、浄瑠璃姫伝承がどのようにして岡崎で生まれたのかという質問に、加藤氏が岡崎の伝承にみられる共通点として舞台が矢矧

(岡崎)であることや姫が川に入水して終わることを挙げ、鳳来寺のお薬師様との関わりについて述べられた。浄瑠璃姫は、三河の国司である父と母の矢矧の長者が鳳来寺の薬師如来に願立して授かった子と伝えられているからである。また「浄瑠璃」が語りの一つのスタイルとして使われるようになった時期についての質問には、物語と人形が結びつく文禄・慶長年間以降のことだろうという深谷氏の回答があった。その後も各地に伝わる

入水譚などの類似例が報告され、話題は芸能としての浄瑠璃にまで発展した。そして最後には、交通の要衝であった点や遊女の存在、また足利氏との関わりなどから岡崎には浄瑠璃姫伝承が生み出される必然性があり、源氏と岡崎との関係をもっと考えるべきだという兵藤裕己氏の指摘があった。岡崎に住む者には大変興味深い内容の例会であったが、事前に先行研究についての紹介があれば、さらに盛り多いものになったのではないかと感じた。絵巻の紹介を望む声もあった。

第32回大会
2008年6月7日(土)、8日(日)
会場 國學院大学 渋谷校舎

研究発表 6月7日
《第一会場》

小林 幸夫 (愛知県)

宮城県黒川郡船形山山麓の祭礼・伝承・地域-
おますざわさまが巡り歩いた村々-

東北大学 小田嶋利江

船形山神社の神の由来を語る縁起が、作神祭と地域の祭祀伝承のうちに、どのように伝えられてきたかを報告された。おもしろいテーマなのだが、時間が足りず、意を尽くせなかつただろうと思うと残念である。寛永元年(1624)の「舛澤権現由来」と豊富に示されていた地域の伝承、この両者の関係が説明されておれば、もっとわかりやすかつただろう。寛永の縁起が、「継子いじめ譚」のモチーフにそって語られることの意味を問うた質問が出たのも、そのあたりのことを尋ねたものなのだ。このような神仏習合の縁起が、どのようにして作られたのか、発表者は祭礼に即してたどろうとされたのである。それがわかるだけに、豊富な資料が生かさなかつたのは心残りである。それにしても「えいほう太子」が、盲目の「くわんいち」となって神と祀られる、この縁起の性格が知りたいものである。

山梨県南部町の西行伝承—西行系図・富士見西行・西行峠の伝承の位相—

國學院大學 小堀光夫

西行の末裔を名乗る遠藤家に「西行系図」が伝わる。この系図が、どのような経緯で作られたのか。そして、南部町の西行伝承（富士見西行・西行峠）と、どのように結びついているのか。発表者もそれを整理しようとしたのだが、説明が十分に行き届かなかったようだ。周辺の地域の西行伝承と、ここ南部町の西行伝承はどのような関わりをもつのか、という参加者からの質問に答えるには、やはり先の課題を整理しておかねばならないだろう。それにしても知りたいのは、この遠藤家の「西行系図」の性格である。おそらくそれは南部町における遠藤家の来歴を調べることに、つながるのだろう。事情があつて、系図の全体像は示されなかったのだが、発表者によって整理された系図の概要を見るだけでも、当たり前のことだが、「伝説は作られる」、ということが窺えるようである。遠藤家の伝承を追跡することで、西行伝説のなりたちたちがわかるのではないか。そんな期待がある。

本田 優子(北海道)

「さて」のない昔話（昭和40年代の昔話の文体）——昔話における「さて」の有無から

昔話研究士鑑会 小林美佐子

小林氏はまず、終止形文末が無く途切れずに語られる「伝承の昔話」には、時間および話の整序という役割を果たす「さて」という接続詞がほとんど存在しないことを指摘した。そして、区切らない語りでは、語り手は「出来事の現場と語りの現在を往還しながら」確かに「ある」とした出来事を聞き手に報告しているが、再話の際に「さて」が入ることにより話が整序され、「あったこと」を聞き手が追体験することができなくなっていると述べた。さらに、このような述べ方の変化が昔話の質的な変化をもたらし、それは昭和40年代に進行したとの見解を示した。たった一つの接続詞の分析から、「口承」の本質的意味、再話が内包す

る問題点にまで論を掘り下げた研究であり、深い学びの機会を得たことに感謝したい。

アイヌ英雄叙事詩成立過程の時間層—yukar における Iskar (石狩) 人の役割—

千葉大学 中川裕

1950年代に知里真志保が、アイヌの英雄叙事詩におけるモチーフをオホーツク人との抗争であると唱えて以来、主として歴史学研究者を中心に、英雄叙事詩とアイヌ史とを結びつける試みがなされてきたが、中川氏はそれらの説を一元的起源説と位置づけ、批判を加えてきた。今回の研究発表ではさらに、英雄叙事詩資料を詳細に分析したうえで、英雄叙事詩の多層構造、すなわち、Otasut (Otasam) 人を主人公とする話が古い層をなし、Iyoci (余市) 人と Iskar (石狩) 人の登場する話、および地域グループ同士の戦いを描いた話は、沙流・胆振地方で発生したのではないかとの説を提示した。また、それらの物語の内容は、交易をめぐる地域グループ間の同盟関係のもつれという、かつての現実を反映している可能性があるとして述べた。まさに、アイヌ口承文芸研究において新たな地平を切り開く大きな問題提起であり、エポックメイキングな発表であつたといえよう。



《第二会場》

真下 厚 (京都府)

澤井真代氏 (総合研究大学院大学) 「石垣島川平における「神のことば」と「神へのことば」をめぐって」は川平集落の饗礼において発せられるさまざまなことばの諸相を提示しようと試みたものである。女性神役ツカサによって神に対して唱えられることばも、来訪神マユンガナシに成り代わった男性神役によって人々に対して唱えられることばも、ともにカンフツと呼ばれていることを押さえて、それらのことばの生態について対照性と共通性を整理する。加えて、ツカサの神への態度とマユンガナシを迎える人々の態度が、神にできないことや分からないことを補うものと解釈できるとし、その点においても共通するとした。氏のこれまでの個別的な分析を統合する総論的な位置にある論であるが、さらなる展開が期待されよう。なお、質疑においてこれらのカンフツの詞章が資料として提示されていないことに疑義が出された。ツカサのカンフツはとりわけ厳しいタブーに包まれており、取材やその公開は困難であることは理解できるが、研究対象に含めようとするならば、資料の提示の仕方に何らかの工夫が必要であろう。

村山絵美氏 (総合研究大学院大学) 「沖縄戦の死者をめぐる亡霊譚—「戦争の話」における「戦後」の視座」は戦死者の亡霊譚が沖縄の戦後社会のなかでいかに生成され、解釈されてきたのかについて詳細に論じたものである。子どもたちを撮影した一枚の写真に日本兵の亡霊の姿が見出され、それに伴って起こった異変が戦死者の遺骨収集を進めていた社会状況のなかでユタによって未供養の戦死者の亡霊と解釈され、行政によって供養されることとなったという事例を当時の新聞資料などによって丹念に追う。そして、こうした戦死者の亡霊譚は戦争の記憶をもととし、ユタによる異変の解釈という文化的背景、戦死者の消息を求める多くの遺族たちや明らかとなった未収集の数多くの遺骨の存在という社会的背景によって発生したとする。論旨は明確で説得的であったと

いえるが、質疑においては新聞資料を直接対象とした点に口承文芸研究として疑義も出された。

なお、質疑時間が5分ときわめて短く、ほとんど議論できなかったのは残念であった。今後、時間配分について検討が必要ではないか。

鈴木 健之 (東京都)

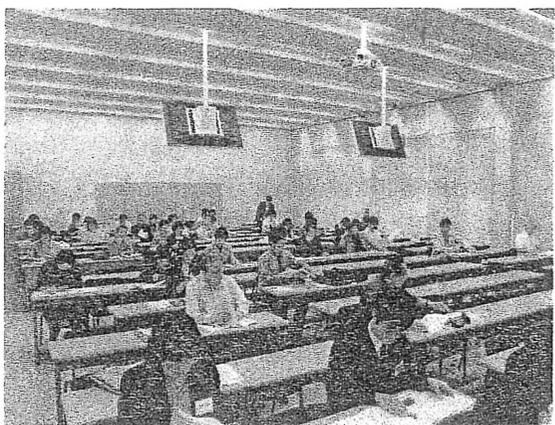
「傀儡とは何か—クグツの語源説とかがわつて—」

神奈川大学 山口達治

これまで山口氏は、本来外来語たる漢語が和語の中に入り、その字音が準訛しすっかり日本語として同化してしまった例として、オニ(鬼)、ウソ(嘘)などの語彙の素姓明かしを考証されてきた。本研究もこの線上にあるもの。まずなぜ傀儡をクグツと訓むのか。6世紀中国の北齊の学者顔之推は、

「俗に傀儡子(傀儡戯と同じ)のことを郭秃と呼ぶのはなぜか」と問われ、「昔秃頭病にかかった郭姓のある男が道化方を演じたところから、後人がその男に似せて人形を作って、その劇を郭秃とも呼んだからであろう」と答えた(『顔氏家訓』巻六書證篇)。傀儡はほかに魁壘、傀儡など表記が多くあり、韻を同じくする量韻語である。同じく量韻語の郭秃の語も伝来し、このkuaktukが日本語化してクグツになり、傀儡をカイライのほかにクグツと訓むようになった。双声量韻の連綿語は漢字表記の一字一字を詮索しても意味がなく、概して語音自体が意味を表象するという中国語音韻論から考えて、k-t-はこぶを、k-l-は中空を意味する。傀儡はもと頭からすっぽり仮面をかぶって舞う追儼劇で、頭から面を外し手に提げて舞うものも現れ、六朝時代に棒使い人形と合流し、後に優勢となった糸操りも含めて傀儡は人形劇の総称となった。傀儡も郭秃も古代中国の儺文化(儺は鬼やらいの意)の土壌の上に生まれたものであると山口氏は結論づける。

モンゴルの「射日」神話『エルヒー・メルゲン』—基本話にみとめられる“七沖”の観念とヴァリアントの検討 愛知淑徳大学 藤井麻湖
藤井麻湖氏の発表はエルヒー・メルゲン神話の物語の構造分析である。エルヒー・メルゲンの基本話は、昔東から西へ七つの太陽が出て早魃になった。人々は弓の名人エルヒー・メルゲン（モンゴル語でエルヒーは親指、メルゲンは弓の名人の意）に太陽を射落とすことを頼んだ。彼は「七つの太陽を射落とすことができなければ、親指を切り落とシタルバガン（リス科ネズミ目の動物マーモット）となり暗い穴の中で暮らす」と誓う。東から順に太陽を射落とし、七つ目を射た時、間にツバメが入ったので、矢はツバメの尾に当たり、ツバメの尻尾は二つに裂けた。最後の太陽は西の山の裏に隠れた。エルヒー・メルゲンは邪魔をしたツバメを馬で追いかけて殺そうとすると、馬が「もしツバメに追いつけなければ、私の四肢を切って草原に捨ててください」と言う。ツバメは逃げおおせて、怒ったエルヒー・メルゲンが馬の前脚を切り落とすと、馬はアラクダーガ（跳兔）になった。エルヒー・メルゲンは誓いどおり親指を切りタルバガンになった。タルバガンの脚の指が4本なのはそのためだ。藤井氏はこの物語の中に十二支中で特定の支から数えて7番目の支同士が対立関係にあるという易学における七沖の観念が投影されていると見る。東から西へ七つの太陽とは、東方に当たる卯から順に西に当たる酉までの七つの支に当たり、酉のツバメに対するアラクダーガ（跳兔）が卯に当たり、馬の午に対する子はタルバガンで、卯と酉、子と午の2組の七沖の関係が織り込まれていると言う。氏はさらに基本話に類する16話のヴァリアントを比較検討し、この神話群が英雄の射日モチーフとタルバガンという穴居動物にまつわる伝説が接合して構成されていることを明らかにし、これがモンゴルのエルヒー・メルゲン射日神話の特徴であると説く。両報告ともやはり発表の時間不足の感は免れない。



シンポジウム

「声・歌・ことばのカー口承文芸および学会の使命と今後」

長野 隆之（神奈川県）

本シンポジウムは、テーマに掲げられているように、口承文芸や本学会の現在と将来を見据えて、歌謡、伝説と観光、ロシア口承文芸学という多岐にわたる分野から報告がなされた。また、本学会の創立30周年記念事業の一環として行なわれた『シリーズことばの世界』（全4巻 日本口承文芸学会編 三弥井書店）の刊行が完結をみたが、この事業を踏まえて本シンポジウムが行なわれたことは、司会の石井正己氏による説明や、資料としてこの本の「発刊のことば」、ならびに、全巻の目次が配布されたことから理解され、オーソドックスではあるが、意欲的な企画であったと評価す

ることができよう。以下、パネラーの要旨を、報告順に紹介する。

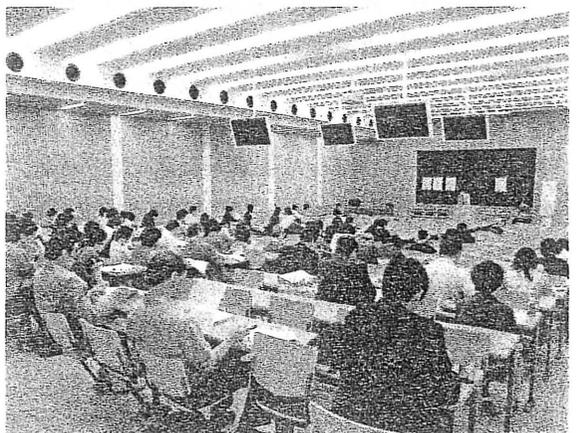
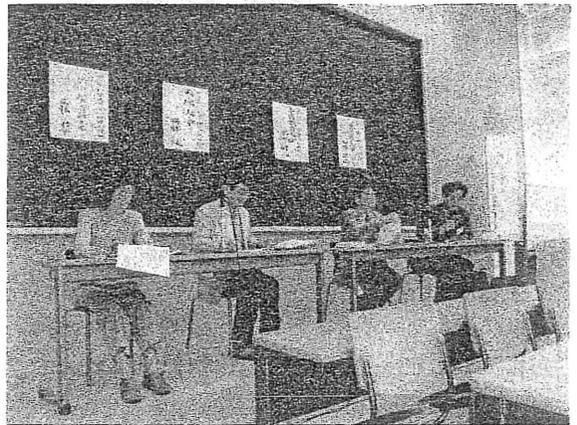
最初の報告である永池健二氏「(うた)という言葉のかたち」においては、表出された言葉の受容者である聞き手の側と、ウタウという言語表現の関係のあり方に焦点を当てて問題提起がなされた。かつて、労働や遊びや男女の出逢いのといった場でウタは共有されていたが、現在ではイヤフォンを耳にして歩く者やカラオケなど、ウタは人と共に楽しむものではなく、自分ひとりだけの世界に入っていくためのものと化したという状況がある。しかし、これは現在だけの現象ではない。聞き手の登場は、文献上、中世以降であり、古代においてはモノログであったという内容であり、古代から現在へと連結させる視点が示された。

2番目の報告の齋藤純氏「はなす、そして、聞く・見る伝承」では、たとえば、観光地で名所を見ながら、それにまつわる伝承を見聞きするように、伝承は「はなす」だけでなく、「聞く」「見る」ものでもあり、体験されるものという指摘があった。また、「法螺抜け」伝承を事例に、それが歴史伝承や伝説、世間話、かつての現代伝説として語られ、また、それが名所を作り、災害の噂として怖れられ、瓦版となって評判になるという、ジャンルを横断するダイナミックな姿が浮かび上がらせられた。

最後の報告は齋藤君子氏「ロシア口承文芸学の現在の課題」では、ロシアの口承文芸研究においても、農村で伝承されていた伝統的ジャンルのみならず、「現代フォークロア」「現代都市フォークロア」といった都市で語られている話に研究者が関心を寄せていること、また、新しい動向として、個人のアルバムに書き添えられた言葉、子どもが書いた怖い話、恋愛小説など、素人によって書かれたプリミティブな文章も研究対象に含められていることが指摘された。

これらの報告がそれぞれに興味深いものであり、それぞれをテーマとして別個に議論を行なうことができる魅力的なものであったといえよう。しかし、それだからこそ、フロアからの質疑も、「声・

歌・ことばのカー口承文芸および学会の使命と今後」というテーマに向けて論点を絞り込んでいくというよりも、各テーマへの個別的なものが主であった。これは、本シンポジウムや本学会にかぎったことではないが、シンポジウムにおいては、設定されたテーマに対して、できるだけ多角的な視点でとらえられるよう、様々な分野から報告者の選択が行なわれる傾向がある。学会で行なわれるシンポジウムでは、設定されるテーマに当該学会の問題意識が反映され、学会の内外に表明されるという意味では、テーマそのものがメッセージであり、シンポジウムが行なわれること自体に意義があるといえようが、ひとつの大テーマをめぐる議論の機会として機能させる仕掛けを設ける必要もあろうかと考えられる。この意味で、フロアとして参加した筆者は、消化不良に終わったという感想を持った。





6月7日の懇親会の様子



懇親会会場前にてお手伝い打ち合わせ

「有形・無形民俗文化財の保護、継承・発展に関する要望書」送付について

6月の総会でも決議がありましたとおり、日本口承文芸学会、日本民具学会、日本民俗音楽学会、日本民俗建築学会、民俗芸能学会、NPO法人社叢学会が合同で、関係省庁国務大臣6名、国会議員111名、都道府県知事47名、都道府県教育長47名、市町村長1806名、市町村教育長1806名に、合計3823通の上記要望書を、7月1日に送付しております。以下にその要望書を紹介いたします。

有形・無形民俗文化財の保護、継承・発展に関する要望書

「市町村の合併の特例に関する法律」によって、多くの地域で市町村の合併が行われた。その結果、地方行財政の効率化のために、地域の伝統文化が存続の危機に瀕している。

地域の伝統文化は、長い歴史のなかで培われた、国民共有の貴重な財産であり、それらを失うことは、民族文化・人類文化の損失である。

伝統文化を守ってゆくことは我々日本人がめざす文化立国にとって不可欠の条件である。

有形・無形の民俗文化財の保護、継承と発展に関わる、博物館・資料館の充実、伝承団体・伝承者への支援、民家や町並み・景観の保存などについて、地域の個性を尊重しながら、行政的配慮の上、必要な人員の配置および予算の拡充などを実施していただくことを強く要望する。

機関誌の投稿論文についてのお知らせ

機関誌委員会

- 投稿論文の採否につき、査読システムを強化します。
 1. ページ制限のある機関誌に、投稿論文の掲載の是非を、より公正に判断するために、査読システムを強化します。
 2. 査読には、原則として3名の日本口承文芸学会会員があたります。メンバーは、機関誌委員会で選考し、運営理事会の承認を得ます。
 3. 査読にあたるメンバーのうち、少なくとも1名は機関誌編集委員があたり、また、テーマによっては会員以外の識者に査読を依頼することができるものとします。
- なお2008年度の機関紙投稿論文の締め切りは、6月20日でした。詳細については、機関誌または、学会HP投稿規程をご覧ください。

○第 56 回例会のご案内

2008 年 10 月 25 日 (土) 午後 2 時から 5 時

場所 國學院大學 渋谷キャンパス

シンポジウム「演じる戦争・観る戦争」

○第 57 回例会のご案内

2009 年 3 月 7 日 (土) 午後 2 時から 5 時

場所 國學院大學 渋谷キャンパス

シンポジウム「口承文芸と女性—研究史に根ざして」

○受贈本 (2008/年 2 月から 2008 年 7 月まで)

『民具マンスリー』第 40 巻 11 号から 12 号・第 41 巻 1 号から 3 号 (神奈川県立日本常民文化研究所)

齊藤君子著『風呂とペチカ』(群像社)

『日本民俗学』第 253 号 (日本民俗学会)

小松和彦還暦記念論集刊行会編『日本文化の人類学／異文化の民俗学』(法蔵館)

★2009 年当初に理事選挙を行います。それに先立ち、2008 年度までの会費未納の方は納入くださるようお願いいたします。当該年度の会費が未納ですと、選挙権・被選挙権がありません。よろしく願いいたします。また、下記 HP に選挙規定を掲載しておりますので、ご一読下さい。

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。
日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局に連絡をするか、学会 HP (<http://ko-sho.org/>) から用紙を取り込んでください。
入会金 1000 円、年会費 4000 円です。
郵便振替口座 00180-4-44864 をご利用下さい。
